ディアスポラのことば
～シマをはなれたシマことば

関西には多くの琉球列島出身者が生活する一方、コリアンや中国、中南米など移民出身者も少なくありません。いままで少数言語としては、もっぱら各国土着の言語が重視されてきました。しかしディアスポラ言語という共通した観点から、双方のコミュニティの言語伝承や使用実践の比較や研究情報を交換することは、今後の研究の発展に資するところが大きいと思われます。

共催： 多言語化現象研究会（第 63 回例会）・琉球継承言語研究会（第 9 回シンポジウム）

大阪大学未来共生イノベーター博士課程プログラム RESPECT

＜プログラム＞

2017 年 3 月 18 日（土）

全体司会　山下仁（大阪大学）

1300-1310　開会の挨拶　パトリック・ハインリッヒ（ベネチア大学）

1310-1430　基調講演①　金城　馨(関西沖縄文庫主宰)「関西沖縄文庫の活動とその歴史」

発表司会　　窪田暁（奈良県立大学）

1440-1525　研究発表①　宮本愛梨（スペイン語通訳翻訳者）「越境する踊りと人―ズンバとマリネラの例から」

1530-1615　研究発表②　宮良信詳（琉球大学）「しまくとぅばの普及に関する最近の動向と課題」

1620-1705　研究発表③　藤井幸之助（同志社大学）「在日朝鮮人コミュニティにおける言語継承の歴史と現状」

1730-　懇親会

2017 年 3 月 19 日（日）

発表司会　新垣友子（沖縄キリスト教学院大学）

1100-1145　研究発表④　仲田幸司（大阪大学大学院）　「沖縄の高齢者介護施設におけるしまくとぅば使用の意義～言語使用実態の考察を通じて～」

1150-1235　研究発表⑤　崎原正志（琉球大学大学院）　「英語で学ぶウチナーグチ教科書"Rikka, Uchinaa-nkai"　の現状と課題、今後の展望について」

休憩

司会　杉田優子（デュースブルグ大学）

1330-1415 研究発表⑥　國吉眞正（沖縄語を話す会）「開かれたコミュニティ『沖縄語を話す会』～今何が問題で、どう解くかを考える～」

1420-1505 研究発表⑦　野上恵美　（神戸大学）　「在日ベトナム人 2 世の言語環境について―「喪失」したものはなにか？」

ミニシンポジウム「シマをはなれたシマことば」

司会　庄司博史（国立民族学博物館）

1510-1555　基調講演② 前田達朗（大阪産業大学）「琉球弧出身者と朝鮮出身者コミュニティの異同とその言語～オールド・カマーであること」

1600-1655　パネルディスカッション

石原昌英（琉球大学）・安田敏朗（一橋大学）・前田達朗（大阪産業大学）

1655-1700　閉会の挨拶　庄司博史（多言語化現象研究会）

越境する踊りと人～ズンバとマリネラの例から～

宮本 愛梨（みやもと　あいり）

ズンバ(Zumba®)とマリネラ(Marinera)は、ともに南米スペイン語圏を発祥の地とし、日本にも移入されたダンスの形態である。本発表では文化人類学的視点から、それぞれのスペイン語コミュニティとの関わりを比較し、文化活動の越境性と移民コミュニティにとってのシンボル性について考察する。

ズンバとは、ラテン音楽をベースに世界各地の音楽に合わせて踊る、フィットネス・プログラムの名称である。中南米出身者の、日本でのズンバへの関与は今のところ少ないが、欧米のフィットネス産業がより盛んな地域では、講師業を生業とする中南米出身者が現れつつある。一方マリネラは、ペルーの伝統舞踊で、日本でもペルー人コミュニティの間で熱心に継承されている。

ズンバとマリネラでは、ダンスの様式や中心的な組織の形態も大きく異なるが、双方を調査して見えてきたのは、それぞれに関与する人たちのライフスタイルそのものの違いであった。

ズンバのインストラクターに対するインタビューを通して見えてきたのは、共通の関心事と共通の言語をもとに、移住先での新たな自分の居場所を作り上げていこうとするしなやかな生き方。マリネラに関わる人たちから見えてきたのは、現在の居住地域に住む同郷人同士が、マリネラの練習会やイベントの開催、コンクールの参加などを通じて絆を深めている姿。そして、これからも日本で生きていくという前提で、日本で生まれ育っている次の世代に伝統を継承してほしいという願いであった。

この二つの形式が、ともにラテンアメリカにルーツをもちながら、ホストコミュニティでの受け入れられ方が違うのはなぜなのか。また、これらの活動に関わる人びとのダンスと人生の選択の違いがどのようにして起きているのか。これら２点に着目しながら、それぞれの活動に関わる人びとと、彼らを取り巻く状況の比較検討を行う。

研究手法としては、近畿圏を中心に参与観察を行いながら、双方の活動組織や運営方式の調査を行った。さらに、日本およびヨーロッパでそれぞれの活動に関与する中南米出身の人びとへの聞き取り調査やアンケート調査を通じ、日ごろどのような思いや目的をもって踊っているのか、また、移住先で踊ることにどのような意味があるのかについて語ってもらった。

移住先でズンバやマリネラを実践している人たちの姿から、いわゆる「デカセギ」という言葉がかつて抱えてきたようなイメージとは異なった側面を見出すことができるかもしれない。

（スペイン語通訳翻訳者：kuroneko@abox23.so-net.ne.jp)

しまくとぅばの普及に関する最近の動向と課題

宮良 信詳（みやら　しんしょう）

2006 年3 月31 日に沖縄県では「しまくとぅばの日」条例が施行されたが、それ以降における県の普及・継承事業とその課題について検証する。その県条例とは、沖縄県はしまくとぅばの日の啓発に努めるとともに、しまくとぅばの普及促進のための事業を行い、市町村及び関係団体にその協力を求めるというものである。

ところが、これまでの沖縄県におけるしまくとぅばの普及・継承事業はほとんど民間に委託しており、委託事業自体にはすでに次のような問題点が露呈している。１）しまくとぅばの普及・啓発のための講座や講師養成の講座にしても、毎年度ほぼ同様な企画の公募をくり返すだけでは、そこからは継続的な主体性は生まれて来ない。それで、目に見える成果を継続して着実に積み重ねていくことで、新たな付加価値を生み出しながら、目標に向かっていくという方式にはなっていない。さらに、２）民間機関にほぼ丸投げするようなことでは、責任の所在が事業を委託した県側なのか、委託された民間側なのかがあいまいで、結局どこも責任をとらない構造になっている。例えば、表記法が吟味されないまま「しまくとぅば読本」が製作・配布されたが、十分活用されていない状況が生まれているのは何故なのか、検証する必要がある。さらなる課題としては、しまくとぅばを共通語並みに自由に遣いこなせる人を平成34 年度までに10 ポイントアップの45.5%にするという目標値が数年前から公表されている。しかし、母語話者の数は確実に減少の一途を辿っているという危機的状況（2016 年県民意識調査を参照）からも明らかなように、その目標値設定自体はすでに問題を露呈している。そのような状況から判断して、早急かつ着実な対応策が迫られ、大きな転換期に県関係機関は直面している。

以上の問題解決に向けては、県内の主要民間団体からの要請（2014, 2015, 2016 年）に基づき、「しまくとぅば普及センター」を設置すべきである。当センターは、しまくとぅば普及の司令塔としての役目を担い、しまくとぅば普及に関する自主事業を企画し、その実施方法を定め、成果のとりまとめを行なうことを目的とすべきである。しまくとぅばは日本語とは別の独立した言語なので、《外国語学習と同等な組織立てられた取り組み》が必要とされる。それで、しまくとぅばの言語的特性や言語の復興策等に精通した言語のスペシャリストを中心とする機関にすべきである。その設置により、普及に関する課題に県が責任をもって自主的に取り組む体制が初めて整うことになる。

(琉球大学：s7miyara@gmail.com)

在日朝鮮人コミュニティにおける言語継承の歴史と現状

藤井幸之助（ふじい　こうのすけ）

沖縄の高齢者介護施設においてしまくとぅばを使用する意義

～言語使用実態の考察を通じて～

仲田 幸司（なかだ　こうじ）

本発表では､言語的マイノリティーであるしまくとぅば話者の言語使用状況を把握し、その使用状況に対する言語意識の問題を検討するとともに、沖縄の高齢者介護施設においてしまくとぅばを使用する意義について考察する。

過去に多くの抑圧的言語政策が実施された沖縄県において、自身の言語は「日本語の方言」であり、公の場で話す言葉ではないという認識が広く共有されてきた歴史がある。そのため、世代間の言語継承が行われず、高齢者が話すしまくとぅばと若者が話す沖縄風アクセントの日本語の間には大きな隔たりが生じている。２０００年代に入るとしまくとぅばの復興運動が始まり、様々な取組みがなされてきたが２０１７年１月１日付けの琉球新報による発表で「しまくとぅばを聞いて話せる」と回答した人は２０代では７．５％のみという危機的な状況に陥っている。

そうした背景を踏まえると、言語的な差異が表出しやすい場所として、しまくとぅばのネイティブスピーカーが多数在籍する沖縄の高齢者介護施設が考えられる。

これまで、高齢者介護施設における使用言語に関する研究がどういった見地から為されてきたのかを確認すると、海外では[移民/高齢化/言語/ケア/認知症]といった観点から、日本では[方言学/移民研究/看護]といった領域からの研究が主だった。しかしながら「同じ日本人」「同じ日本語」とされながらも実際の言語的乖離が大きいため意思疎通が難しいしまくとぅば話者を対象とした研究が少なかった。そこで、沖縄の高齢者介護施設でどのような言語使用が行われているのか、以下の方法で確認した。沖縄県内における高齢者介護施設の中から無作為に五つを選出し、介護施設職員に対しインタビューを実施すると共にフィールドノーツを作製した。加えて、しまくとぅばを使用し沖縄の高齢者との交流を図るNPO 団体・個人の活動に筆者自身が参加し、入居高齢者との関わりの中で得られた発話も取り入れ、考察の対象とした。調査時使用言語は[しまくとぅば、日本語]である。まず、言語使用実態としては１、地方・都市間における言語使用状況の差異、２、世代間のしまくとぅば運用能力の差異、３、言語多様性要因の日本語使用が見られた。そして、施設職員と高齢者間での言語の一致（または不一致）による影響に考察を加えると、①「島人ぬ宝」的言語観を持っていること､それでもなお②話者が減っていくことへのしょうがなさ、どうしようもなさ→しまくとぅばの経済的価値の低さ、地域間の言語多様性による制約によるもの、そして③しまくとぅば運用能力は各々の成長過程に一任されていた、つまり公的に学習する機会が一切無かったということがわかった。また、④職場で使用される会話が限定的であること、反復が多いことから文脈判断で「わかっていた」というものであった。最終的に「沖縄の高齢者介護施設におけるしまくとぅばの使用する意義」は入居高齢者とのコミュニケーションの促進、各世代間のディスコミュニケーション（言語的・心理的断絶）を乗り越える働きとなっているのではないかと結論づけた。

（Namaharan narahee turashinfeeroo, Unigeesawira. →keissamas1babu@gmail.com）

英語で学ぶウチナーグチテキスト『Rikka, Uchinaa-nkai!』の現状と課題、今後の展望について

崎原　正志（さきはら　まさし）

ハワイおよびその他の海外の沖縄系コミュニティーでは自らの言語（以下、ウチナーグチと呼ぶ）を学ぼうという機運が高まってきている。しかし、彼らが居住地にいながら独学でウチナーグチを学ぶのはとても難しい。例えば、ウチナーグチが学べる教科書の類はほとんど日本語で書かれているため、日本語がわからない海外の沖縄系人は利用したくても利用できない。そこで、琉球大学の狩俣繁久教授と発表者である崎原正志が中心となって、2010 年頃から英語でウチナーグチが学べる教科書『Rikka, Uchinaa-nkai!』を共同で作り始めた。その後、現上智大学ポルトガル語学科講師の儀保悦子ルシーラが加わり、ポルトガル語版も作成することとなり、2011 年に英語版とポルトガル語版の初刷を発行した。2012 年には第二刷を発行し、2016 年に第三刷を発行した。

本発表では、『Rikka, Uchinaa-nkai!』が記述文法の研究成果に基づいて作成された経緯やその内容の特徴等に触れながら、ハワイやブラジルでの実際の使用例を報告する。さらに、使用者のフィードバックから得られた課題や改善点について言及し、今後、『Rikka, Uchinaa-nkai!』がどのような教科書を目指すべきかについて論じる。

『Rikka, Uchinaa-nkai!』は、ハワイ大学の Okinawan Language & Culture という講義内で使用されているという報告があり、個人の利用に留まらず、教育現場においても活用されている。したがって、個人でも教育現場でも利用できるような教科書作りを目指さなければならない。また、當山奈那が作成したような体系的な「音声教材」が必須である（當山, 2017。発表当日配布資料にて提示する）。

ハワイでは、ハワイ語の復興運動が功を奏して、若い世代のハワイ語話者が増えている。しかし、NeSmith（2003）は、ネオハワイ語という伝統的なハワイ語と異なる新しいタイプのハワイ語の出現に警笛を鳴らしている。言語復興が進むにつれて、若い世代のウチナーグチ話者も増えてくると予想されるが、『Rikka, Uchinaa-nkai!』も数あるウチナーグチの中のたったひとつのヴァリエーションを提示することで、「ネオ沖縄語化」を助長してしまう可能性があるという問題を提起し、それについても議論してみたい。

【参考文献】

當山奈那 (2017, January 15).「100 年後のあなたに: 音声教材作成の展望」『沖縄タイムス』p. 33.

NeSmith, R. K. (2003). Tūtū's Hawaiian and the emergence of a neo Hawaiian language. In K. Ho'omanawanui (Ed.), *'Ōiwi: A Native Hawaiian Journal* (vol. 3, pp. 68-77). Honolulu, HI: Kuleana 'Ōiwi Press.（http://www.traditionalhawaiian.com からも取得可能）

（琉球大学大学院・日本学術振興会特別研究員：masashisakihara@gmail.com）

「開かれたコミュニティ『沖縄語を話す会』

～今何が問題で、どう解くかを考える～」

國吉眞正（くによし　しんしょう）

沖縄語を話す会の沿革
・1987 年：会の発足、今は亡き城間朝昌氏（首里出身）が中心となり会が出来た。
　文芸、音楽などの基層となっている沖縄語「うちなーぐち」は、このまま放置しておくと、
　先人たちが残してくれた諸々の文化は、形を変えながら衰退の道を歩むことになる。
　この危機状態にある言語を次世代へ継承するため、若い人たちが出やすい会にした。
・1993 年：「うちなーぐち」は、早くから独立した言語だという認識もあって、会の名称を「沖縄語を話す会」とした。

沖縄語を話す会の活動
・会員数：約 50 名　　メンバーの割合：5.5：4.5
　「5.5：沖縄県外出身者、4.5：沖縄県出身者と本土で生まれた家族」
　沖縄県外出身者は、大和人（やまとぅんちゅ）、スイス人、イギリス人、オランダ人、ロシア人、韓国人、スペイン人など。外国人は、留学生がほとんどで、日本に滞在中沖縄語とは、どういうものかを見学して帰国している。
・沖縄語を話す会は、沖縄語の素養を高めながら、対話などを通して親睦を図るようにしている。

勉強会のあり方
・初心者（全く話せない方）A クラスと、少し話せる方やベテランの方 B クラスの講座を提供する。沖縄語の音韻体系については、将来文芸、音楽、芸能を勉強して行くために、言葉を使ってその音が身に付くように配慮している。そうしないと、適切な発音で話すこともできないし、書くこともできない。そして辞典も引くことができない。
・沖縄にも文芸や芸能などといった固有の文化があるが、その根底に言語があるわけで、言葉が持っている豊かな音や、表現も日本語と異なるものがたくさんある。このようなことを学べるように配慮している。同時に言葉の背景にある生活や習慣も学べるようにした。
・月に 2 回勉強会を開いている。東京会場は、第一土曜日、第三土曜日に開講している。川崎会場は、第 2 水曜日、第 4 水曜日に開講している。座学とオーラルメソッドによって、各自がレベルアップできるように配慮している。特に発音と抑揚は、実際に話してみないと身に付かない。
・ディクテーション（音声を聞いてその表記をする）「音楽の歌詞、組踊の台詞、散文など」強制はしないが、散文または、韻文について、希望者にはディクテーションを勧めている。
・添削指導（個別対応）

勉強会の成果の確認
・学習成果を発表する場：年に 2 回、7 月の「夏の宴」と、12 月の「忘年会」の席で、朗読と、朗読の応用として紙芝居を用いて「うちなーぐち」による学習成果をプレゼンテーションしている。さらに進んでいる方には、うちなーぐちでスピーチもしている。
・会報で発表：「作文の力をつけるため、会報で発表する場を提供している。

「うちなーぐち」の現状、問題点をどう解くか
・次世代へ「うちなーぐち」を継承して行くのに大きな阻害要因となっているものを挙げる。
　（1）　散文の分野（2）韻文の分野

（沖縄語を話す会：hasama-kuni@nifty.com）

在日ベトナム人２世の言語環境について

―「喪失」したものはなにか？―

野上恵美(のがみ　えみ)

本報告では、在日ベトナム人の集住地域における在日ベトナム人２世の言語環境について提示する。近年、日本でも定住外国人の増加に伴い、「セミリンガル」について大きく取り上げられるようになってきた。セミリンガル問題は、当事者にとって母語の喪失、母文化の喪失だけでなく、思考や認知にも大きく関わってくると考えられている。2007 年には、「関西母語支援研究会」が立ち上がり、母語の重要性ならびに母語教育の意義について検討されてきた。

報告者が研究を行なっている神戸市長田区内の在日ベトナム人コミュニティにおいても、若い世代の母語の喪失がコミュニティの課題として認識されており、NPO 団体が母語教室を運営している。この母語教室では、日本で生まれ育った在日ベトナム人２世の母語もベトナム語であると考えられている。それでは、在日ベトナム人２世の言語環境がどのようなものなのか、セミリンガルの概念を用いつつ検討していく。

セミリンガル(ダブルリミテッド)とは、二言語環境にいながら、第１言語(母語)も第２言語も年齢レベルに達していない状態をさす。在日ベトナム人２世の言語環境も家庭内ではベトナム語に囲まれ、それ以外は日本語に囲まれていることから二言語環境に置かれているといえる。必然的に日本語を運用する時間が多いため、日本語が母語であると認識するものもいる。そのため、親子間においてコミュニケーションギャップが生じ、「親子間で深い会話ができない」、一方で「自分の複雑な気持ちを言語化することができない」といった状況がみられる。2 世の中には、ベトナム留学によってベトナム語を習得しようとするものもいる。

本報告では、９歳の頃に難民とし来日し、その後、家族、親族間の通訳としての役割を担ってきた女性のライフストーリーと、在日ベトナム人２世として生まれ、さまざまな葛藤を経て、日本語とベトナム語によるラップ音楽を作っている男性ミュージシャンとのライフストーリーを事例に、セミリンガル状態にあるといえる在日ベトナム人２世自身が、何かを失ったと感じているのか、それとも何かを得たと感じているのか検討する。そのうえで、在日ベトナム人２世のセミリンガル状態を個人の言語環境からではなく、外国にルーツを持つ人びとの言語環境をまなざす主流社会のあり様から読み解く。

「関西母語支援研究会」ホームページ：
URL：http://education-motherlanguage.weebly.com/

(神戸大学：eminogami@yahoo.co.jp)

基調講演①

関西沖縄文庫の活動とその歴史

金城　馨（かなぐすく　かおる）

琉球弧出身者と朝鮮出身者コミュニティの異同とその言語

～オールド・カマーであること

前田　達朗（まえだ　たつろう）

　ここで言う「琉球弧」とは琉球列島全域を指すのであるが、「琉球」が沖縄と同義と捉えられることが多いため、奄美群島を含めたものという意味で用いる。

今回のシンポジウムのテーマ「シマを離れたシマの言葉」とはそもそも琉球弧出身者の阪神間への移住、あるいはディアスポラの経験からわかることは何か？という沖縄での話し合いから着想された。「シマ」から見ると彼らは同胞でもあると同時に遠い存在でもある。「世界のウチナンチュー大会」が開かれ、海外に移民した人々については一般にも関心が持たれているが、本土への移住は「国内移動」と考えられている。ただ「移民の町」を自認する沖縄県南風原町の町史のように、ブラジルやハワイへの移民と「本土」への移住を少なくとも近似の事象と考える見方や感覚もあるようだ。

奄美人、沖縄人と朝鮮人は、阪神間に集住しコミュニティを形成しているというだけでなく、その形成の過程や阪神間に移住した時期、日本敗戦後の状況など共通していることが多く、彼らの言語についても日本への同化を求められる過程で減衰する道筋を辿った。しかし在日朝鮮人が移民コミュニティもしくはエスニック・マイノリティと一般に認識されるのと比べて、琉球弧出身者は「日本人」とされ、特に奄美と奄美出身者コミュニティにおいては、沖縄との近似性を否定することを手段として自分達が「日本」の内側にいることを主張してきた。またこれらコミュニティをめぐる研究者たちの認識も一般とさほど変わらなかったとも言える。マイノリティ研究にもやはり境界線があるのだが、朝鮮人、沖縄人、奄美人が「日本人」とされている/された時間と時代は、その「境界線」の恣意性によるもので、彼ら彼女らの意思によるものではなかった。

ここでは今回のシンポジウムの構成を考えて、奄美と奄美出身者の辿った道筋を軸に、他の２つの移民コミュニティとの違いや共通点を「言語」を手掛かりとして述べることで、移民研究や移民言語研究を含めたマイノリティ研究のあり方をもう一度考える問題提起をしたい。

事務局より

・廊下など、会場以外では静かにしてください。
・参加費 **500** 円は二日間有効です。配布資料は事前に参加申し込みをされた方の分のみ用意しています。会場の湯茶はご自由にご利用ください。
・参加費の領収書は受付で発行します。必要な場合は受付まで。
・昼食の持ち込みは会場でも可能ですが、ゴミは持ち帰ってください。
・一日目の懇親会への参加申し込みは **13** 時までに受付まで。
なお懇親会場は、沖縄料理の梯梧家　（でいごや）の予定です。
地下鉄谷町線中崎町駅 徒歩約４分。会費は **3000-4000** 円程度。
https://tabelog.com/osaka/A2701/A270101/27000620/

共催組織について

○多言語化現象研究会

多言語化現象研究会は1999年の結成以来、国内外のフィールドにおける社会言語学、多言語・多文化・多民族社会研究、移民研究などで多くの成果をあげ、これまで 60回を超える例会と3回の研究大会を開催し、若手研究者の育成、実践家との交流の場ともなっている。例会は主に大阪周辺で行われているが、東京の多言語社会研究会とも連携し、多くの研究成果をあげて来た。その成果の一部は『辞典　日本の多言語社会』(岩波書、2005年)、『多言語社会日本―その現状と課題―』(三元社、2013年）などで世に問われている。

連絡先：tagengoka-gensyoo@idc.minpaku.ac.jp

ＨＰ：http://www.r.minpaku.ac.jp/hirshoji/tagengo/

○琉球継承言語研究会

琉球継承言語研究会はRyukyuan Heritage Language Societyとして2008年に第一回のシンポジウムが開催され、その後沖縄・奄美と東京で年に一回のシンポジウムを行って来た。その全てがユネスコの危機言語に指定されている琉球諸語の国内外の研究者による記述言語学や社会言語学分野の研究だけでなく、各地で行われている言語継承の実践に関わる人々の取り組みを広く伝える場となっている。『琉球諸語の保持を目指して:消滅危機言語をめぐる議論と取り組み』（ココ出版、2014年、シリーズ多文化・多言語主義の現在, 6)、「Language Crisis in the Ryukyus」(Cambridge Scholars Publishing,2014)などに、その成果の一部が紹介されている。

連絡先：

ＨＰ：

○大阪大学未来共生イノベーター博士課程プログラム

http://www.respect.osaka-u.ac.jp/